

著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小3までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。

## 8 常識を疑え

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑧

花まる学習会代表 高濱正伸



### ◆ある児童の告白

もう一〇年以上も前だが、六年生の児童が、休み時間の雑談で、「学校の授業は、何のためにあるんでしょうかね」と話をし始めた。

彼の告白によれば、それはどうやら色んな先生が見に来る授業であつたらしく、算数の「平行四辺形の面積」がテーマだつたという。平行四辺形の形をしたダンボールを持ってきた先生が、この面積がどうなるかを、班ごとに話し合いなさいと告げた。塾に行つて何人かの生徒は、そんな底辺×高さに決まつていないかと思つていて、しかし、先生に気を遣つて、知らないふりをし、話し合つてふりをした。ほとんど誰も本当に考えてなごいかなかった。そのまま空白の時間が過ぎて、誰か発表できかなと言われたので、端っこをタテに切つて移動させると、長方形の形になることを示し、底辺×高さになりますということ

先生は喜んでくれ、無事授業は終了した。「いったい、何のためにやつていゝるんですかね。何か先生の給料のために、みんな我慢して座つてただけだつた気がします」というのが、彼の意見だつた。

こういう本音は、学校の先生の耳には、なかなか入らないのではないだろうか。

### ◆「教えて、考えさせる」が筋

このように、公式や定理のようなものを最初から考えて話し合わせ導き出させようというような授業が良いとする考えが、横行していた時代があつたように思う。

それは、ある種の信仰のようなものだなあと、外からは見えた。的はずれに見えた。そして、「まだまだ当面は、塾が繁栄するだろうな」と確信した。

塾ではそんな無駄な時間はもたせない。私だつたら、同じ四〇分で子どもたちの頭を最大限に「本当に」活動させるべく、公式の説明などは黒板で五分で説明し、とつ

### ◆研究授業で起こつたこと

私も何度か、研究授業というものをさせていた。その中の一回、五年生対象で、「多角形の内角の和」の授業を行ったことがある。

私の大まかな計画は、四角形・五角形の内角の和を示すことによつて、まず、一つの頂点から対角線が、N角形ならば(N-3)本引けること、つまり三角形が(N-2)個になること、したがつて180×(N-2)個の個数を計算すれば、内角の総和は出る、ということ。それが何角形でも出せるということだということに、気づかせることだつた。

概ね順調に進んでいたのだが、最後に○○角形の内角の和を計算させたところ、一人の女子が手を挙げた。前で発表させると、期待する図と異なる補助線を引いている。「ああ、勘違いしてしまつたな」と思つた。しかし彼女の「よいものが見えた者を持つオーラ」を感じた私は、何度も説明を繰り返してもらつた。

すると分かつたのは、彼女が全くオリジナルな解答を生み出したということだつた。中心部に向かつて各頂点から補助線を引き、ちょうど一〇〇個の三角形ができること、そして内角の和は、180×100から、

中心部に集まつた360度分の角度を引けばいいというのが、彼女の解法だつた。

それは、何の保証もない、衆目の中の授業をしている私にとつては、非常に有り難い感動的な締めくりだつた。

### ◆指導案つてどうなんだ？

多くの先生方が、その子の思考と発見の力に、感動したと感想を言われたが、尊敬する教頭先生は、「私もしやつていたら、自分が準備したものと違つていゝると、すぐに正解を示していたと思う。あそこで、彼女の言ひ分に踏み込んで耳を傾け、それも新しい正解だと理解したところが、すごいものだと思つた」と言つてくたさつた。

ここで、いつも感じていたことに言及したい。それは指導案という魔物についてである。学校の先生と話すとき、そのことで非常に時間をとつていて大変だということや言われる。若い時代は、上司にあたる方からの朱入れをされるものだと聞く。

それは本当に有効で意味があるものなのか。ここで生徒からのこういう反応があるというような細かい予想まで書かれていゝるやに聞く。映画の台本ではなく、ライブの生きた授業なのだから、もっと大雑把なフロッチャートで良いのではないか。

なぜなら、授業で一番大事なのは「本当

に面白かつた」という児童自らのうちに起こる知的躍動感なのであつて、ダンドリ通りに進めることではない。

つまり、予定外の流れに対応できたのは、指導案という束縛から自由に、普段から授業をやつていたからということ、言いたいのである。

### ◆常識を疑え

平成一七年内閣府が行つた調査結果によると、学校と塾・予備校を比較した場合、子どもの学力の向上という面では、「塾や予備校の方が優れている」と評価した人が七割に及んで、「学校の方」と答えた人は四割だつたという。

人材の比較では、むしろ学校の方がバランスのとれた優秀な人が多いと私などは感じるのに、なぜだろう。その理由を、根本から考え直した方がいいのではないか。教職課程に意味があるのか、指導案は、研究授業は……。

同じ免許制度でも、医師免許に対して同様の批判(病院より外の何らかの機関の方が優れているというような)が全く考えられないことと比較しても、もっと「現場で公立学校の授業が効果を発揮してない」という一点を凝視し、旧来の常識を、疑つてみる必要があるのではないだろうか。